

「びっくりぽん」から「マッカーサー」まで ～西洋文明の普遍性と日本文化の個別性、双方への希求～

三菱UFJリサーチ&コンサルティング 理事長 **中谷 巖**

【司会】 2016年度のMURCオープンカレッジの第1回の講演ということで、「びっくりぽん」から「マッカーサー」までというタイトルで理事長の講演のご案内をさせていただきます。

このタイトル自体は、理事長とお話ししている中で「普遍性」と「個別性」の話の中で出てきた言葉をそのまま使わせていただいております。西洋の合理主義に出くわした日本がどういうふうに来し方、過ごしてきたのかという点も踏まえて、きょうはお話しいただく予定です。

ご案内にありました通り、だいたい1時間程度のお話をいただいた後で、30分程度の質疑応答をするという流れで考えております。ご出席いただいた皆様におかれては、名古屋の方、大阪の方も含めていつでも質問できるぐらいのつもりで、ぜひ質問のネタを考えながら聞いていただければまことにありがたいです。

それでは、理事長に引き継ぎます。よろしくお願いいたします。(拍手)

講演

普遍性と個別性

皆さん、こんばんは。中谷です。ことしもオープンカレッジがスタートして、お忙しい中たくさん聞きに来ていただいてありがとうございます。今日は、人間世界が「普遍性」と「個別性」という2つの相反する傾向を追い求めてきたということ、人間の歴史はこの両者のせめぎあい、相互作用、緊張関係の中で育まれてきたといった話をさせていただきます。希望的観測ですが、このような視点から何か仕事の参考になるヒントが得られるのではないかと考えております。

人間の文明史を紐解くと、人間というのは常に2つの方向に興味に向いてきた。人間は生活していく中でさま



ざまな現象に直面する。そのさまざまな経験を「抽象化」できないか、「一般化」できないかという興味のひとつ。別の言葉で言えば、森羅万象の自然界にある種の「普遍性」を求めたいという傾向です。もうひとつは、個別の経験をさらに深掘りしてより個性的でユニークなものにしたいという「個別化」への興味。この2つです。

もちろん、世界をすべて普遍的な言葉で説明しきるということはおそらく不可能です。現実世界に存在する個別事象には、ロジックや合理的解釈だけでは言い尽くせない「不識」な部分というものが必ず存在するからです。もちろん、このような言い方に対しては、「いや、聖書にはすべてが書かれており、普遍性そのものだ」という批判がありうるでしょうが、ここではこの種の神学論争はとりあえず、横において議論を進めさせていただきます。

たとえば、建築について考えてみましょう。まず、ル・コルビュジエの「サヴォア邸」はいわゆる「近代建築の5原則」を満たす近代の代表的建築です。この建物は近代世界ならば基本的にどこに建てられていても違和感がない。特定の文化とか、地域の伝統とかにはあまり関係がないように思える。それは近代建築の「機能性」を追求しつくされた建物だからです。

これに対して、もうひとつ、ル・コルビュジエと対照的なのは、スペインのアントニオ・ガウディの作品だと思えます。「サグラダ・ファミリア」や「カサ・バトリョ」

(バトリヨ邸)ですが、これはル・コルビュジエの「サヴォア邸」と違って、スペインの風土を強く感じさせる作品になっています。いわば、徹底的に「普遍性」から逸脱し、スペインの個別的伝統に固執した作品と言えるのではないのでしょうか。ガウディの「カサ・バトリヨ」はたしかに徹底的に個別文化にこだわっている。そこにこの建物の価値がある。しかし、ここには「普遍性」の追求という意図は感じられません。

私のオフィスは神谷町の21階にありますが、窓から見える建築物はきわめて多様です。近代的な高層オフィスビルも数多くありますが、これらの建物は別に東京でなく、どこか他国の近代都市に建てられていてもまったく違和感を覚えない「普遍性」の高い建物だと言えるでしょう。しかし、窓から見える芝の増上寺は徳川將軍家の菩提寺であり、絶対に東京になければダメな「個性」の強い建造物です。

しかし、高層ビルのような「普遍性」の強い建物と、増上寺のような「個性」の強い建物の間に位置する、いわば中間的な建造物が実は非常に多く存在しています。こういった状況に対するひとつの考え方は、「本当はもっと近代化しなければいけないのだが、種々の建築規制があるため、一気に近代化できない」というものです。この説を支持する人たちは、だから東京は遅れているんだ、もっと規制緩和して、東京を近代的な、競争力のある都市にしなければならないと考えます。

しかし、別の考え方もあります。東京がニューヨークのマンハッタンのような「普遍性」の高い高層ビルで埋め尽くされれば、東京の魅力はなくなるという考え方です。「普遍性」の強い高層ビルと、「個性」の強い日本的な建物、そして、その2つを折衷したような中間的な多くの建造物、これらが混在しているところに東京の面白さがあるという考え方です。私自身は後者です。東京が効率性一辺倒の摩天楼で埋め尽くされるようになってもなんの魅力もないのではないかと考えています。

東京オリンピックのメイン会場となる新国立競技場の当初案はイギリスの女性建築家、ザハ・ハディド氏がデ

ザインしたものでしたが、当初予算を大幅に上回るということで没になりました。私自身は、経費が高すぎるという問題に加え、彼女が設計した新国立競技場は日本の伝統文化とまったく関係ない、きわめて「普遍性」の高いデザインだったというところに問題があると考えていました。あの建物を東京の真ん中に建造する文明的意味はどこにあるのかと疑問に思っていたのです。あのデザインに対しては、「ちょっと待ってよ、せっかく日本でやるんだから、もうちょっと日本文化を反映したものにできないのか」という批判的意見が強かったと記憶していますが、健全な反応だったのではないのでしょうか。そして、最終的に採用された隈研吾氏によるデザインはかなり日本的な要素が取り込まれました。東京オリンピックに使われるエンブレムも4案ありましたが、最終的には一番日本的な感じがする「市松模様」を取り込んだデザインに決まりました。これでよかったと思います。オリンピックの精神を表すと同時に、東京で開催するのだから、日本らしい要素も欲しい。「普遍性」と「個性」のバランスが大事だということになりますが、他の3案はほとんど日本を感じさせないデザインだった。

ツリーとリズム

なぜこういうことを申し上げているのかと言いますと、人間が培ってきた歴史を振り返ると、常に「普遍的」なものと「個別的」なもののせめぎ合いの中で文明が形作られてきたということを申し上げたかったからです。「普遍性」と「個性」のバランスをどう取っていくのか。「合理性」「効率性」「機能性」といった論理の積み重ねで形作られる「普遍的なもの」だけでは、人間の基礎的欲求は実は満たされず、そこに説明ができない「美意識」や「歴史観」「自然とのかかわり方」等の「個別的なもの」も同時に必要としている。この2つの欲求を組み合わせしていく。そのための人間の営みが歴史なのだという理解です。

蛇足になりますが、プラトンのイデア論においては、物事にはイデア、理想形というものがある。その理想形を追い求めるということが人間の仕事だというのが

ギリシャ哲学のエッセンスと言えるかもしれません。

たとえば、有名な「ミロのヴィーナス」やミケランジェロの「ダビデ像」を想起して下さい。ミケランジェロはルネサンス時代の芸術家ですからギリシャ時代の人ではありませんが、徹底的にギリシャ彫刻を再現するためにこの彫刻を制作した。女性と男性の理想形（アイデア）、究極の美というのはこういうところにある、ということを見せるための作品です。芸術家の仕事とは、現実には存在しない理想形をいかに形にして示すということにあった。

それはそれで美しい作品が生まれたわけですが、逆に、アイデアの追求にこだわりすぎたという側面があった。人によって評価は分かれますが、それが強過ぎたために、ギリシャの芸術というのは決まりきった様式のものが多く、ダイナミックな作品は生まれなかった。なぜかという、目の前にある現実が存在するもの、「個別的なもの」は、真実の存在ではないというアイデア思想が非常に強かったので、「個別的な要素」をいかに排除して、普遍的なアイデアに近づけるかという考え方が強かったからです。アイデアへの憧れには、それはそれで素晴らしいものがあつたにせよ、それだけでは人間世界のおもしろさは表現しきれない。これが近代以降の考え方です。ギリシャ文化というのは、確かにシンプルで簡潔で、大変美しいけれども、それ以上のものはない、心に引っかからないと言う文芸評論家もいます。ここでも「普遍的」なものと「個別的」なものの対立を見ることが出来るわけです。

世界は、普遍的原理で説明できるのかという点については、哲学の世界でも昔から延々と議論が続いているテーマですが、この問いに「イエス」と答えたのがデカルト『哲学原理』です。その中で主張されているのが「ツリー構造」の理論です。デカルトは「西洋文明こそ普遍的なものだ」と主張し、すべての現象はヨーロッパから出てきた文明の木、このツリーの枝葉によって説明できるとしました。それが「ツリー構造」です。

ところが、それに対してドゥルーズ＝ガタリという2人の哲学者が『千のプラトー』という本を書きまして、西

洋から生まれた文明が世界のさまざまな文明の原点にあり、すべてはそこから派生したものだという「ツリー構造」の理論は、西洋の思い上がりに過ぎない、西洋から発した1本の大きな木によってすべて世界が説明できるなんてとんでもない、西洋中心の世界観は間違っている、ということを主張しました。これを「リゾーム構造論」と呼んでいます。リゾームとは地下茎のことで、世界は西洋を中心に創られたわけではなく、ネットワークでつながっており、文明に優劣はなくすべて平等という思想です。

この対立は哲学の世界でも根深く存在しているようです。いずれにしても、近代世界においては、西洋が世界文明の中心的存在であったことは間違いない。今でもわれわれがモノを考えるときには、自動的に西洋的な物の考え方で考えている場合が多い。そうになっている直接的な原因は、「びっくりぼん」（明治維新の時代）から「マッカーサー」（第2次世界大戦直後の時代）まで、日本の教育システムが「西洋近代こそ文明の中心」という思想で埋め尽くされていたからです。実際、西洋文明こそが普遍的真理であるという前提のもとにほとんどの教科書は書かれてきました。

しかし、そろそろ、このことに関して日本人にも西洋文明がすべてだという考え方に対する反省が出てきたのではないのでしょうか。オープンカレッジで、次回来てもらう予定になっている原田伊織さんという人は、『明治維新という過ち』という本を書いていますけど、明治以降の日本史が薩長史観（薩長両藩が日本を近代化に導いたという歴史観）で書かれていることに対して、それは偏った見方であり、薩長両藩を持ち上げすぎていると批判されています。多くの日本人は、明治維新の際の薩長の激しいテロリズム（数々の暗殺）が大きな役割を果たしたと思われるのに、それに対しての歴史的総括がないまま、あれは致し方なかった、正しい行動だったなんて信じ込まされているというわけです。薩長史観という言葉を西洋中心史観と言い換えればその構造はこれまで議論してきたことと同じ構造になります。

覇権国（歴史の勝者）が発するメッセージは、「普遍的」なものとして受け取られがちであり、事実、私たちももすれば、明治以降の「薩長史観」、第2次世界大戦以後の「マッカーサー史観」、そして、近代以降今日までの「西洋中心史観」をベースに思考し、行動する習慣が定着している。しかし、そのような思い込みから脱却し、「普遍」と「個別」の相互作用について意識を高める時期を迎えたのではないだろうか。私がそう申し上げる理由のひとつは、西洋近代から生まれたグローバル資本主義が行き詰っているからなのです。

しかし、西洋の知識人の多くは早くから西洋文明の危機を認識していました。たとえば、シュペングラーは1918年に『西洋の没落』という著作をものにしている。1918年といえば、第1次世界大戦が終わった年です。世界をリードしているはずの普遍的なヨーロッパ文明が大量の戦死者を出す悲惨な第一次大戦を引き起こしてしまった。それ以前の19世紀という時代のことを振り返ってみても、世界の先端を行っているはずのヨーロッパはほとんどの時期、戦争に明け暮れていた。なんで理性的であるはずの西洋人が、戦争に明け暮れてきたのか。何かおかしい。そういう問題意識で『西洋の没落』は書かれたのです。

普遍的な西洋文明のエッセンスは「都市」に集約されていますが、都市は母なる大地から遊離した人工的な存在です。ここに流通する貨幣は現実的なものに一切制約されることのない形式的・抽象的・知的な力であり、文明を支配している。ここに群集する人間は故郷を持たない頭腦的流浪民、ノマドです。彼らは高層の賃貸アパートに住み、自然とは離れた環境でみじめに眠る存在だということです。

彼らは日常的労働の知的緊張を、スポーツ、快楽、賭博という別の緊張によって解消している。このように大地を離れ極度に強化された知的生活からは、不妊の現象が生じる。シュペングラーの予言では、人口の減少が数百年にわたって続き、世界都市は廃墟となる。知性は空洞化した民主主義とともに破壊され、無制限の戦争をと

なって文明は崩壊する。経済が思想、宗教、政治を支配した末、西洋文明は21世紀で滅びる。

これが1918年に書かれたこの本の主張です。人口がまだ増え続けていたこの時期に不妊現象が起き、人口減少に至ると看破したのはすごい。日本の人口減少も人工都市、東京の出生率が飛びぬけて低いことが大きな要因になっています。シュペングラーが1918年の段階でこういうことを議論していたということは驚くべきことです。大事なのは、ここで「文明」というものが、大地から栄養を吸収している地域の伝統文化から切り離され、人工的なものになってしまったために、栄養分を吸収することができなくなり、活力が枯渇してしまうという考え方です。実はシュペングラーは、「普遍」と「個別」の緊張関係がなくなると文明は崩壊する、没落するということを言っているわけです。「普遍」が生きながらえるためには「個別」文化からエネルギーの供給を受ける必要があるということです。

普遍的文明としての資本主義

その普遍的な文明のうち、最も現代的なものは資本主義というシステムです。資本主義の普遍的な考えというのは申し上げるまでもなく、資本へのリターンを最大化するのが経済活動の目的だということです。そのために必要なのは、あらゆるものを「商品化」することです。人間の労働サービス、土地、それから貨幣、こういったものを土着的なものから解放することで「商品化」し、自由に取引できなければいけない。資本の増殖のスピードを最大化するためのメカニズム、すなわち、マーケット・メカニズムというものをあらゆる生産要素に適用できるようにしなければいけないということです。さらに言えば、これらが自由に国境を超えて取引できるようにしなければならない。グローバリズムのことです。資本は必要ならば、国境の壁を越えて利潤が最大化できるようにいつでも自由に移動できる必要がある。グローバル・キャピタリズム。これが1990年ころから世界を駆け巡った「構造改革」の思想的背景です。



中谷理事長

さらに言えば、企業というのは資本家の利潤を最大化するための「道具」であるとする考え方も生まれてきました。そこから生まれてきたのが、いわゆる「エージェンシー理論」に基づくアメリカ流コーポレートガバナンスの理論です。この考え方によれば、経営者は株主の代理人（エージェント）であり、経営者が自分勝手なことをしないように、彼らが株主利益を最大化するように仕向けることが必要だという理論です。

そのために何が必要か。いろいろありますが、大きく言って2つです。ひとつは、経営者を監視するため、中立的な社外取締役を取締役会定数の半数以上、雇わなければならないというもの。もうひとつは、経営者の報酬を株価に連動させる等して、経営者の利益と株主の利益を一致させるような報酬体系をつくらなければいけないというものです。

このアメリカ流ガバナンスの考え方を日本の上場企業にも適用しようと、金融庁がコーポレートガバナンス・コードを作り、日本企業にそれに従うように指導を始めています。それに対して、上場企業は、この金融庁が持ってきたコーポレートガバナンス・コードに対して、どういう対応をしたらいいのかということをいろいろな形で議論しています。

私の理解では、大部分の日本企業の経営者は、「企業が株主のもの」という考え方には違和感を持っている。本音では、ちょっと違うよねこれ、と思っている。社外取締役によって経営を監視するなんてことできっこない。会社

の現場なんて社外の人間にはとうてい分からない。現場で何が行われているか知らないで、どうして経営者を監督できるのか。その証拠に、三菱自動車はなんであいうことになっちゃったのか。フォルクスワーゲンはどうして不正ソフトを使ったのか。東芝は委員会等設置会社で最も先進的なガバナンスを持っていたはずなのに、利益操作をしてしまった。ということで経営者が株主のエージェントとして動かなければいけない、だから社外取締役が経営者を監督するというアメリカ流のコーポレートガバナンスは実は破綻を来しているのではないのか。こういう疑問です。

日本の経営者が、本心からはアメリカ流のガバナンスのあり方を信じていないとすれば、どうすればよいのでしょうか。それは、はっきりと、アメリカ流のガバナンスは少なくとも日本企業にはそぐわないという意見を発信すべきだと思うんですね。金融庁がアメリカ流のコーポレートガバナンスを導入しようとしても、日本の経営者がこぞって「それは企業経営の実態にそぐわない。だからわれわれは金融庁の提案してきたガバナンスコードには従わない」という意見を出すならば、金融庁もその意見に従うかもしれない。その結果、世界に日本企業はステークホルダーを重視した日本流ガバナンスでやっていくということを知らしめることができるかもしれないと思います。

日本人の悪いところは、自分が信じていないことでも「お上」に逆らうと面倒だから、さしあたり「お上」の言う通りにしておこうとする態度です。これでは、アメリカ流に飲み込まれてしまい、結局、日本の競争力もダメにってしまうかもしれない。したがって、グローバル資本主義がさまざまな矛盾を露呈している現在、日本のような非西洋の国がその矛盾に対するアンチ・テーゼを提案していく。そういったことが必要になっているのではないのでしょうか。

ひとつ例題的にお話ししますと、コダックと富士フィルムのケースです。十数年前、アナログ（銀塩）フィルムの需要が激減してしまって、デジタル化していきました。

コダックは「資本の論理」に従ってあっさりと倒産の道を選びました。儲からなくなったら撤退する。これが「資本の論理」です。しかし富士フイルムは、売り上げの80%以上あったアナログフィルムの需要がゼロになっても会社をたたまなかった。何としても、この80%をほかの業態で埋めようと必死に努力しました。アメリカ的な考え方、あるいは資本主義の考え方だと、もうそれは撤退しろという形になります。

なぜかという、資本家は自分でポートフォリオを組むことができるからです。儲からなくなるところから資本を引き揚げ、それを成長分野に再投資すればよいという考え方です。コダックがつぶれたって、それにかわって他の投資先企業が伸びてくれればそれでいいと。はっきり言えば、「ポートフォリオの組みかえは資本家に任せてください」ということです。

こういう考え方は日本にもかなり浸透しています。IR説明会で若いアナリストたちが質問するのはことごとく「資本の論理」をベースにしているように見えます。たとえば、「どうして余剰な現金を持っているんですか。どうしてそんな無理な多角化やるんですか。採算の悪い事業からはさっさと撤退すべきでしょう」という質問です。それに対して、たいていの日本の経営者は、曖昧な言いわけに始終するというのがせいぜいのところですよ。

でも、もっと根本的に議論してほしいというのが私の言いたいことです。富士フイルムは日本の会社であり、コダックとは会社のあるべき姿に対する基本的思想が違う。企業は資本家の「道具」ではなく、人々が生活する場所だ、共同体だと。富士フイルムという会社（共同体）に縁あって入社したのだから、そこで生活を共にしている仲間たちとことごとく頑張るんだと。そこに組織の存続価値がある。もちろんアメリカの資本家たちはそうは考えないでしょう。会社は解散して失業が発生しても「労働市場」があるから、雇用調整はマーケットに任せれば良いという考え方です。しかし、日本の場合、会社はみんなのものという共同体思想が強く、これが日本企業の競争力の源泉になっている場合も多いと。

企業というものは社会的に見てどういう意味があるのか。アメリカ的な資本主義の思想は、企業は単なる契約の束であって、「生活の場」とか「共同体」なんていうものはそれが資本へのリターンを最大にするという目的とはそぐわない場合には意味がないということになります。だから、だめな会社はすぐ撤退してください、倒産してください。こういう自然淘汰の思想になっているんだけど、はっきり言って日本人はそれにはなじまない。もちろん転職する人はたくさんいますけれども、依然としてトータルで見ると、やはり企業は共同体、生活の場であるという感覚が強い。そのことに引け目を感じる必要は毛頭ないのではないのでしょうか。それならば、そうと世界に向かって堂々と主張すればよいのではないのでしょうか。企業をそのように見ることが日本企業の価値観であり、実はそのことこそ、日本企業の競争力の背景にある考え方なんだと言わなければいけない。そういうことをベースにした理論の再構築をしなければいけない。ということだと思います。

「選ぶ文化」と「育てる文化」

それと関連したことを申し上げれば、「選ぶ文化」と「育てる文化」。実は私が毎週土曜日にやっている私塾で、トヨタの張名誉会長に来ていただいたことがあります。彼はご存じのように、アメリカで10年間苦勞に苦勞を重ね、アメリカにおけるトヨタの地盤を築き上げた功勞者です。その塾で、受講生のひとりが、「アメリカ企業とトヨタでは何が根本的に違っていったのか」といった趣旨の質問した時、張さんは、「アメリカは『選ぶ文化』です。つまりマーケットから、人材にせよ、資本にせよ、技術にせよ、必要に応じて調達すればよい、場合によっては会社を買うことも含めて、市場を利用して最適な会社組織をつくれればよいという考えだ」というわけです。しかし、トヨタの考え方はまったくそうではなくて、「育てる文化」という答えでした。

長い期間、トヨタという独特の共同体の中において、トヨタ的な価値観に染まり、その中で良い商品、品質の高

い商品をつくるにはどうしたらいいかということで、みんなで悩み、互いに提案しあいながら、商品の完成度を高めていく。こういうことは、マーケットから必要に応じて人をとってくるだけでは達成できません。だから、少なくとも中核的な人材は時間をかけて内部で育てなければいけないだと、こういうことをおっしゃいました。

それと非常に共通するなと思ったのは、やはり、私の塾に来ていただいた東レの日覚社長の話です。東レはご存じの通り1970年ごろに合成繊維の競争力がなくなり、炭素繊維の開発に社運を賭けました。これが商品として会社の大黒柱になるまでにそれから40年、50年もかかったのです。初めはボーイングに飛行機の機体に炭素繊維を使わないかという提案をしたが、まったく相手にされなかったそうです。繊維で飛行機をつくる、そんなばかなことないでしょうということで、門前払いもいところだったというお話でした。

その間にゴルフクラブや釣竿等で食いつなぎながらもしつこく開発を続けた結果、ついに今ではボーイングの機体の相当部分は炭素繊維によってつくられているそうです。そこにくるまで40年ぐらいかかっているわけです。これ「選ぶ文化」でできますか。どんなに門前払いを食わされても、ひるまず、炭素繊維の将来性に命を懸ける技術者たちがいた。彼らが磨きに磨いてきた技術の結晶がこの炭素繊維なんですよ。これも「育てる文化」の中でしか生き残れない。炭素繊維の会社は、今は世界中で日本にしかないそうです。西洋的な資本主義の思想では、そんな40年もどうなるか分からないものにコミットできません。その結果、炭素繊維の会社は、今では世界中で東レ、三菱レイヨン、東邦レーヨンの3社しかないということです。

すべての業界において「育てる文化」が良いということはないと思います。ただ、ある種の技術とか、ある種の製品・品質とか、そういうものを完成させるためには、「育てる」という考え方もどうしても必要になる場合がある。それにもかかわらず、何もかもアメリカ型モデルに追随する必要はない。堂々と日本型モデルを主張すればよい

のではないのでしょうか。

東芝がなんで利益操作やっちゃったのか。東芝は最も先進的なコーポレートガバナンス形態を持っていた会社ですよ。委員会等設置会社ですから。取締役の過半数は社外であるし、みんな有名な人ばかりです。でも、会計操作についてはまったく無力だった。それは無理もないことです。現場で何が行われているのかなど、社外の人間には分かるはずがないのですから。

アメリカ流コーポレートガバナンス論のもうひとつの柱は、報酬はできる限り業績や株価に連動すべきであるという考え方です。つまり株価に経営者の報酬を連動させると、経営者も株価が上がるように意思決定するはずだという考えです。そういうふうには経営者を動機づけすべきだという考え方です。東芝の社長がどうして、もっと利益出せと部下に命じたのか。強い金銭的インセンティブをつけ過ぎると、それに引っ張られてしまう。長期的な意味で正しい投資計画ではなくて、短期的に利益が上がるような投資計画に走ってしまうかもしれない。業績連動報酬はやりすぎると意思決定を歪める可能性があるということです。

まとめますと、アメリカ流コーポレートガバナンス論の2本柱は、いずれも間違った経営判断を正す力はないということです。大事なのは会社の組織文化、風土、それから倫理観、こういったものを会社の中でしっかりと創り上げられているかということです。私はしたがって、アメリカのビジネススクールも、間違った「エージェンシー理論」を教えるのではなくて、本当は倫理学を重要な教科として教えるべきだと思います。上役が不正なことをやれと要求してきても、現場に十分な抵抗力があるようにすべきです。

このような考え方について皆さんは賛成なさるのでしょうか。もし賛成なさるのなら、しかるべき立場の人ははっきりとそういう意見を発表すべきなのではないのでしょうか。アメリカ流のコーポレートガバナンス・コードを金融庁が押しつけてきたときに、「あれは間違っている。アメリカ流ガバナンスはわれわれには合わない」と、日本の

上場企業のほとんどのトップがそういうことを明言すれば、金融庁の役人たちも、彼らの意見を取り入れるようになるのではないのでしょうか。

ところが日本の経営者は、金融庁とけんかするのはしんどい、とにかく言う通りにしておこうと、こうなっているんじゃないか。これが日本の健全な資本主義体制をゆがめていると私には思えるわけです。だから普遍に対する、一見普遍と見えるものに対する抵抗というものをどういうふうにしていくのが、日本にとっては大きな課題になっているのではないのでしょうか。

シリコンバレーでアメリカのエリート層の人たちと会ってきたベンチャーキャピタル関係の仕事をしている友人に聞くと、アメリカという国はやっぱりすごいと、アメリカは依然として元気だし、次々に新しいベンチャーが生まれている、あの国はすごいと言っていました。しかし、彼はアメリカの底辺にいる民衆と会ってない。アメリカ社会の分断に気づいていない。底辺の人たちのグローバル資本主義に対する恨みにも根深いものがあり、それがトランプ現象となって表れている。こういう点を考えると、世界を覆っている西洋文明という普遍的世界観というものが、一番大もとのアメリカで今根元から崩れようとしているのかもしれない。これまで「普遍的真理」と言われてきたものと「リゾーム的価値」というものがどういう形で融合していくのか、お互いに是正しあっていくのかということこそ非常に大きなテーマであるし、日本人にとっては特にそうなんじゃないかというふうに私には思えるわけです。

「からごころ」と「やまとごころ」

もちろん日本にも問題は多々ある。日本が理想的な姿にあるとは言えない。本居宣長は江戸時代の国学者ですが、彼は玉勝間という本の中で、「からごころ（漢意）」について語っています。「漢意とは、漢国のふりを好み、かの国をとふとぶのみをいふにあらず、大かた世の人の、万の事の善悪是非（よしあし）を論（あげつら）ひ、物の理をさだめいふたぐい、すべてみな漢籍（からぶみ）の趣な



るをいふ也。」

つまり自分は、これこそ真実なんだって人に言い募っているわけだけど、それってほとんど漢籍（中国の文献）、つまり今で言うところとアメリカ的な発想に則って言うのに、そのことを自分が気づいていない。これこそ自分が考えついた正しいことなんだと言っているけれども、ほとんどこれは「漢籍の趣なる」なんです。ということをなんと江戸時代後期にいた本居宣長さんが言っている。

本居宣長は、「古事記伝」という44冊の「古事記」の研究をやった人です。「古事記」というのは、まだ日本に日本語というものがちゃんとできていないときに書かれた神話ですけども、これを外来語である漢字を使って書いたものです。外来語を使っていかにして日本の心を表現したのか。本居宣長はこういった大きなテーマに挑戦した。本居宣長はこの「古事記」の1行1行を丹念に読んで、この漢字というものを使わざるを得なかった、非常に苦しみ抜いた日本人の本心（やまとごころ）を読み解くという作業をやった。

先ほども述べた明治維新の「びっくりぼん」、戦後の「マッカーサー」も本居宣長流に言えば同じ「漢意」です。幕末ぎりぎりまで「攘夷、攘夷」と言っていた勤王の志士たちが開国した途端「文明開化」、「鹿鳴館」でしょう。もう徹底的に「漢意」（正確には「夷心」）になってしまった。それは便法として短期的には必要だったという見方ももちろんあり得ますけど、その後、第二次大戦があって、今度はマッカーサーが入ってきた。アメリカンデモクラシーというまた新しい波が来て、教育の現場とかそいう

うのがみんなそれによって塗り変えられた。この「漢意」という日本人の病理は相当だと思わざるを得ない。今日でも、自分ではそうと気づかずに「漢意」の中にひたっている人（アメリカかぶれ）がどれだけ多いか。この「漢意」からどうやって脱却するのか。必要なのは、われわれ自身がこういった「漢意」の病理に気づくということなのではないでしょうか。

本居宣長は、それぞれの国、民族の行動パターンとか思考の形を理解するには、神話の世界に戻らなければいけないと言っている。しかし、マッカーサーは日本人が日本の神話を学ぶことを禁じました。その結果、われわれはほとんど日本の神話のこと知らないですよ。『古事記』は学校では勉強しちゃいけない。禁止されちゃったんだから。でも、アメリカとかヨーロッパの子供たちは、『ギリシャ神話』とかユダヤ・キリスト教の『創世神話』とかみんな知っていますよ。みんな勉強しています。神話というものは、その民族のエートスを色濃く反映していますから、自分の民族のことを知ろうと思ったら、神話を勉強することが不可欠なんです。

この西洋世界を席卷したユダヤ・キリスト教と古事記を比較してみるとどうか。最大の違いは、神が世の中をつくった（天地創造）というのが西洋です。神は英知の塊であって、一定の意図のもとにこの世界を天地創造をした。だから神様というのは、人間から見るとむちゃくちゃ偉いわけです。神と人間世界は完全に断絶しています。神が人間世界をつくったんです。したがって、ユダヤ・キリスト教文明の下では「つくる」というのがキーワードになります。

ところが『古事記』を読みますと、神様と人間は非常に近いです。ひょっとしたらわれわれは神様と血がつながっている。ご存じでしょう、天孫降臨で天照大神のお孫さんが高天原から降りてきて、そこで待ち受けていた猿田彦たちと融合して行って、そこで神様の子を生んできたわけ。だから、神様とわれわれは血がつながっている。そして何か神の意図にあらかじめで上がった世界があるのではなくて、生んだ者が次々に何かになっ

ていく。「生む」と「なる」というものが古事記のキーワードなんです。ですから、日本人にとっては血の連続性というのが非常に重要です。永遠に続くことは大事、系譜的連続における無窮性という発想が強い。これが万世一系の皇室という考え方とつながっているのですね。

「今」「ここ」を大切に考える

もうひとつ、『古事記』で一番大事なのは、「今（いま）」です。今、目の前にある問題をどうやってしっかりとこなしていくか。過去から受け継いだものを将来にどうやって受け継いでいくのかというのが現役世代の非常に重要な仕事です。だから、日本企業は現場が強い。受け継いできたものを目の前でうまくこなしながら、次世代に受け継いでいく。こういう「今」「ここ」を徹底的に大切に考えて日々努力する。これが日本人の根本的発想の中にある。

ところがユダヤ・キリスト教的世界では、人間にとって一番大事なことは「最後の審判」です。「最後の審判」がいつくるかは分からないけど、「最後の審判」がいつか来るよという教えですね。その教えの日に、自分も神の国に行けるようになるにはどうしたらいいか。つまり「最後の審判」というものに焦点を合わせて、そこに行くための戦略を考えるわけ。「最後の審判」、これはエンドです。エンドというのは、英語では「最後」という意味と同時に「目的」という意味もあります。この最後の目的、つまり神の国に行くという目的に向かって、自分は今日の生活をどういうふうに過ごすべき、これを戦略的に考えなければならない。西洋人が戦略的なのは、ユダヤ・キリスト教的な物の考え方が根底にあると思います。

ところが日本人は、日々受け継いだもの、目の前に起こってきた問題をどうやってこなすかということが、無意識のうちに最も重要なテーマになります。ですから、次々にこなしていく。だから現場が強い。アメリカ人に日本人と同じような現場のパフォーマンスを上げろなんて、これは無理です。逆にアメリカの経営戦略を日本にそのまま押しつけようと思ったって、そんなのうまくいかない。アメリカでMBAを取った人は、基本的に日本で

は偉くなれないことが多い。もし、このことが事実だとすれば、それは欧米と日本とは根本的な物の発想が違うから。MBAの勉強が意味ないと言っているんじゃないでしょうか。それは知っておいた方がいいでしょう。つまり階級社会的な発想で物を考えると、どういうことになるのかということをちゃんと分かってなければいけないということです。ですから、このオープンカレッジなんかでリベラルアーツを勉強する理由はこういうところにもあります。こういうところまで来ると、非常におもしろいことがいろいろ考えられるということだと思います。

もう時間がなくなったので最後、皆さん方は次の問いに答えてください。日本本社の経営トップが買収した外国企業のマネジャーたちに初めて会いに行きました。この時あなたが本社の経営トップだったとして、いかなる態度をとるのがよいと思いますか。

1. 友好的な態度をとるため真っ先に握手を求める。
2. 皆さん方のやり方を尊重するので頑張ってほしいと激励する。
3. 日本企業のやり方に従うように促す。

さあ、皆さん方、手を挙げていただきましょう。皆さんがトップだったらどれですか。分かれましたね。それはある意味当然です。相手がどういった歴史や文化を持っているかによって答えが変わってくるからです。大事なのはその買収した会社はどこの国で、どういう宗教的、文化的、歴史的があるのかということを十分に知ったうえで対応を考えるべきです。階級社会的な国の会社ならば、はるばる日本からやってきたマスターたる人たちが、自分たちに対してどういう命令をしてくれるかということを心待ちにしているわけです。その時に、仲良くしようねと言わんばかりに握手するだけでは主従関係が崩れる。だって彼らが心待ちにしているのは、新しいマスターがどんなすばらしい戦略、ビジョンを持って自分たちを指導してくれるのかと思っているのに、握手されたら対等の立場になるわけです。それでは相手は戸惑ってしまいます。

もちろん、ただ単に傲慢な態度をとりなさいというこ

とを言っているわけでは毛頭ありません。でも、それぞれの国、民族の特性、価値観の根源にあるものを見きわめて、どういう対応をとったらいいかということを考えなければいけないということを申し上げたい。唯一の答えは実はありません。

以上、「普遍」と「個別」という話から敷衍しまして、さまざまな話題を提供させていただきました。皆様方のご意見をお聞きできればと思います。(拍手)

質疑応答

【司会】 どうもありがとうございました。

ということで質疑応答の時間に入らせていただきましたと思います。非常にブロードなというか広範なテーマをありがとうございました。いっぱい質問がこの中にあると思うので、まずは挙手ベースでお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

では、齊藤さん。

【質問】 ひとつ質問なんですけど、われわれは環境の分野でEUがすごく理論先導で、そこでバーンとビジョンをつくって、それが日本にもアメリカにも行くという流れがすごく多いんですけど、EUはまさに「設計主義」なのかなと思って見ていたんですけども、やはり失敗するんですかねというところが質問なんです。よろしくお願いします。

【中谷理事長】 「設計主義」というのは、それまでの実績や歴史的伝統、民族の価値観等に重点を置かず、その時代時代の理念をもとにして制度を創ることができるという考え方ですが、僕は「設計主義」にまったく意味がないと言っているのではありません。特に、日本人の場合、「保守主義」の伝統が強く、「連続性」を大事にし過ぎるために、改革が遅れがちになる傾向がありますから、「設計主義」の思想も適度に必要です。たとえば日本における人口減少問題は非常に深刻であり、これに歯止めをかけようとする、相当思い切ったことをやらざるを得ない。成り行くままに任せてほっといたら、間違いなく人口はどんどん減っていく。日本人のエートスの基本は「無窮性」「連続性」にあるということで、成り行きに任せてその場その場で頑張ればいんだという話だけではどうにもならない。日本国自体がなくなるからです。

環境問題についても、そういう「設計主義」的な戦略はどうしても必要になると思いますけれども、本来ならば日本人の環境に対する、自然に対する共生思想というものが根本にあったはずなんです。そして、人間

の問いに教えてください。

宮トッパがM&Aした外国企業のマに初めて会いに行きました。この時、経営トッパだったとして、いかなる感じだと思いますか？

：とるため、真っ先に握手を求める。リ方を尊重するので頑張っている。

：業のやり方に従うように促す。



中谷理事長

による自然環境の搾取に対しても節度のある対応をしてきたと思うんですけども、現代においては西洋的な「自然は征服すべき対象」というフランシス・ベーコン流の思想が強くなりすぎている気がします。ここで一度立ち止まって、自然との共生という根本的な精神に立ち返る必要があるでしょう。

それから、ヨーロッパ、EUが環境対応の先進国だと言われているけれども、彼らがやろうとしていることの裏側にある本当の狙いをしっかり分析することが必要なのではないかと。そういう努力を通じて、日本人の環境問題における貢献余地があるのではないかと思います。

確かにおっしゃる通り、EUが先進的な取り決め、規制をやって、それに対して日本企業はどうやってそれに合わせるかという現場主義的な発想から抜け出せないという問題は確かにある。グローバル社会においては、ルールメイキングの力が最重要だという言う人は多いですね。ただ、私もそれは反対ではないのですが、ルールメイキングにおける手法も欧米的な手法で同じように発想してやっていくのではなくて、日本人が提案するルールメイキングの基本的な思想というものを大事にしてほしいという気持ちを持っています。もっともそれは具体論ではないので、実際、環境問題をやっておられる齊藤さんのお考えを本当はお聞きしたい。

【質問】 企業の人たちが集まった委員会でそういった議

論を2回ぐらいしましたが、半分ぐらいの人が、戦略的になるためにはすごく悪人にならなければいけない。植民地をあんなに持ってきたイギリスの真似をわれわれはするのか、それがわれわれはハッピーなのかみたいな話も出てきてしまって、非常におもしろかったです。日本はもう戦略をつくることにエネルギーを割くのをあきらめて、できたものをいかに現場力でやってそこで力をつけるのが良いのではないかと。逆にそれを守れないレベルの技術のルールをつくって、それができるのは日本だけみたいな世界もいろいろある。そういうところで日本は真摯に対応していくことでプレゼンスを高める。ルールメイキングしなくてもできるんだというところで、力を入れませんかみたいな話がメーカーさんから出てきて。それが一般的な話かどうか分からないんですけど、その委員会では、本当にルールメイキングがいかに大事か。でも、いかに日本人に向いていないかみたいな話が、みんな共通として思っているんだなというところがありました。

【中谷理事長】 ひとつだけ具体的な例をお話しします。空調メーカーのダイキンという会社があります。今、中国でナンバーワンのエアコンメーカーは「格力」という会社ですが、ここは格安のルームエアコンを大量に生産し、販売している会社です。ダイキンのインバーター技術は省エネ技術としてダイキンの比較優位を支える非常に重要な技術です。ところがダイキンはある時、驚いたことに、その虎の子のインバーター技術を格力に無償で提供すると決めたのです。

その結果、格力は、なかなか手に入らない高価なインバーター技術が無償で手に入れた。格力は大喜びで自分たちが生産するエアコンにそれを装着することにしました。ダイキンはなぜそんな「敵に塩を送る」ようなことをしたのか。その理由は2つあった。

ひとつは、その見返りに格力の低コストの量産技術を学べることです。もうひとつは、格力が中国共産党に大きな影響力を持っているという点に注目したのです。格力はインバーター技術を自社製品に装着すると

同時に、インバーターを今後、中国で生産されるすべてのエアコンに標準装備させるように共産党に働きかけ、それを実現したのです。これで、ダイキンのインバーター技術が中国全体で使われるようになった。

インバーター技術が無償で提供するということだけ考えると、ダイキンがなぜそんなことをしたのか分からないでしょうが、インバーター装着を標準装備にしたことで十分採算が合うことになります。これは厳密な意味でルールメイキングではないんだけど、実は思わぬところからそういう流れになって、その結果ダイキンはすごく有利な立場に立つようになったというわけです。

なかなか面白いケースですね。それぞれの業界で多様なやり方が可能性としてあるということだと思います。わざと規制を強化して、日本企業だけが対応できるようにしようとか、そういう考え方もありだと思えます。実際に日本が石油ショックの後、自動車が成功したのはそうですよね。アメリカ・カリフォルニア州の排ガス規制が強化され、対応能力の優れた日本がすごい得したということがありました。そういうことで、ルールメイキングについては非常に多角的に考えていかなければいけないことなんでしょうね。

【司会】 ありがとうございます。

齊藤さん、よろしゅうございますか。

きょう実は何人か新入生の諸君も来てくださっているんですけども、誰か代表して。

よろしくお願いします。

【質問】 本日はお話まことにありがとうございます。

本日のお話を伺っていて、皆を代表してというわけではないのですが、ぜひご意見をお伺いしたいことがあります。中国の方々、特に中国のエリートの方々を持たれている考え方をどうとらえたらいいのかなというところがあります。きょうお話しいただいた「設計主義」に少し近いような考え方も持っている一方で、ただその源泉がヨーロッパとはまた違うような気がするんです。



なんでこのような話を差し上げているかといいますと、昨年しばらく北京大学に行って、環境問題に関する議論をさせていただいたことがございまして、その際に気づいたのは、北京大学の方々は割と観念的なところに基づいて、それぞれの地方がどうだからこういうことを話しているんだというわけではなく、安定性という概念が大事だからこういう話をしているんだ、と彼らは言っていました。その概念に基づいていろいろな解決策について話をしてくれました。

逆に日本人は意外と地方に基づいた話をしていたのですが、その際に思ったのは、概念的なものがベースにあって、そこから議論するという仕方に彼らがなれているのかなと思いました。ただ、それではヨーロッパの方々の持っている概念的なものに基づいてツリー的な思考をしていくのかというと、たぶん少しその出自が違って、彼らは国の中にいろいろな人たちがいて、それをまとめ上げるために何かひとつの大きな強い概念を持って、そのような考え方をしているのかなと思いました。古代ギリシャに関してはあまり詳しくないんですが、ではギリシャがそういう環境にあったかという、もう少し民族的な統一性はあったと思います。

もう一度まとめますと、中国の方々も少し「設計主義」的な概念に基づいた話をされることも多いとは思いますが、ヨーロッパとも少し違うような気がしています。中国の方々の考え方をどのようにとらえたらよいのかというのがご質問です。お願いいたします。

【中谷理事長】 それはちょっと難し過ぎる質問だと思います。

ます。それは北京大学に留学したあなたのような人の方がよく分かっていないのでしょうか。ヨーロッパのすごいところは、啓蒙思想という、国境や民族を超えた思想を創り上げたところです。もともとキリスト教自身が、特定の民族を優先していたユダヤ教から卒業して、どこの国の人にも恩恵が行くような宗教に仕立て上げたから、世界的に広まったわけですね。

中国の場合は、ヨーロッパほどの普遍的議論ができているかどうかは微妙ですが、日本とはかなり違うと思います。中国は非常な多民族国家なので、この人たちを「漢字」という普遍的道具を使いながら統一していたわけです。

中国は儒教の教えを捨てて共産主義思想に走ったわけですが、今では共産主義イデオロギーがほとんど消滅してしまった。宗教も捨て、共産主義思想も捨ててしまった今、中国は何を頼りに国を維持していくのか。これが今問われていることだと思います。何か中国全体を統一するような普遍的な物の考え方、価値観というのはどこにあるんだろうということを、今中国の指導層は模索していると思います。

【司会】 それでは、大阪と名古屋の方にもご質問をいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

【質問】 それではひとつ質問させていただきます。

きょうのお話を聞いていて、一言で言うと民主主義のアプローチのような話から、要はマジョリティーとマイノリティーの話があって、民主主義は基本的にマジョリティーというのは間違える、正しい民主主義ですね、マジョリティーというのは間違えるのが当たり前なので、マイノリティーの立場であったり視点をもって、マジョリティーがやっていることをちゃんとチェックしようというのがちゃんと働くと、民主主義というのは機能するというのがあって。

たとえば企業の中でいうと、さっきの現場主義もそうなんですけど、現場がちゃんと元気で、なおかつ会社としてやっている企業というのは、現場の意見がちゃんと経営側にフィードバックされて経営そのもの

が、監視というわけではないですけど、チェックされているとかそういったことがちゃんとできていると強い会社になっていくというのは経験的に感じているんです。そういった場合にそういうマイノリティーというか、現場であったりその本筋ではない部分から、そういうチェックをかけていくアプローチというのは、理事長から見てどうお感じになるのかなと。

なぜこういう質問をしているかという、先ほどからいろいろ議論があるように、今の話というのは二元論的なんです。右と左があって、左から右を見てみようという話なので。そもそも二元論というのは、ヨーロッパのデカルト主義的なところにある、アウフヘーベンのところにあるものですから、これは実は理事長のおっしゃっていることとはちょっと違うんですよという話なのか、このあたりが全然整理できないものですから、質問させていただいたということです。

【中谷理事長】「デカルト的な二元論」だとおっしゃいましたけど、そういうふうに分けないのが日本的な考え方なんじゃないでしょうか。だから、どんなに経営の立場から見て能力がないと思われる人がいたとしても、その人を西洋の会社だったら、お前は能力ないから首だというふうになるんだと思うのですが、日本の場合は、その人にふさわしい仕事を与えて、なんとか活用していこうとする。共同体の仲間になった人たちに對する上に立つ人たちの対応というのは、アメリカ的な組織と日本的な組織ではかなり違うのではないのでしょうか。

ですから、マジョリティーとマイノリティーと初めから分ける必要はなくて、一体感を醸成するというのが経営の非常に大きな課題になっているんじゃないですか。だから少数者の意見をチェック機能として働かせるという発想自体が、日本社会にはなじまないところがあるような気がしますけど、いかがでしょうか。

【質問】 大変よく分かりました。ありがとうございます。

【司会】 ありがとうございます。

そろそろ最後の質問にしたいと思います。



中谷理事長

お願いします。

【質問】 参考図書に出ていた「反知性主義」のことを中心にお聞きしたいんですが、実は私は中高がクリスチャンスクールだったんですけど、今から思うと長老派なんです。この本にも結構長老派のことがいろいろ書いてあって、今になって長老派というのは、こういう人たちだったんだということがよく分かったんですけども、それで子供心に聖書を毎日礼拝であるんですけども、そのときにすごく頭に残っているのが、「神との契約」というのがものすごく出てくるわけです。それを毎日毎日聞くわけです。それともうひとつ怖いなと思ったのは、神は結構罰を与えるんです。それで従わせる。神って意外と怖いなというその2つが頭に残りながら卒業していったということがあるんです。

それで社会人になりまして、日本が割と超大国になったときに、結構世界と軋轢があるときに、「契約」という概念を向こうがやっていて、日本と割とフェーズというか、感覚的に合っていないという感じがありました。それはなぜかという、日本だと「口約束」というのはなんとなく約束みたいなんですけども、向こうにしてみると、契約書をつくらなくても約束は約束で守るみたいな感じがあって。それはどこにベースがあるのかなと思ったら、たぶん「神との約束」というのは、神ではなくて「口約束」なんです。そういうところが違うのかなと思って、本質的なところが日本と違うなと思ったことがあります。

最近になって思ったことは、これは宗教やっている人に聞いたんですけど、日本のクリスチャンというのは数%、2～3%ぐらいしかいないらしいんです。一方で韓国は2～3割とかすごい違いがあるんです。ですから、先ほど理事長が宗教は割と戦略的にキリスト教はやるということをおっしゃったのですが、韓国というのは意外と戦略というか、戦術というか、結構たけているところがありますね。一方で日本は、そのところは弱いというのが確かにあると思うのです。そう思うと日本人は、キリスト教になじまない思想を持っているのかなと思ったんですけども、その辺についてお考えを聞かせていただければと思います。

【中谷理事長】 まず「契約」という概念が基本的に日本人にはなじまないですね。「契約」というよりも「暗黙の了解」で動く。神様と一緒に手を携えているいろいろなことを成し遂げましょうよという物の考え方だから、1回1回契約するとかそういう発想になっていないです。

たとえば会社に入ったときも、厳密な契約書に皆さんサインして入っていますか。みんな暗黙の了解でしょう。暗黙の了解の中で善をなすという考え方で日本社会はやってきたのに、それを契約というふうになると、では契約書に書いてないことはやってもいいのねということで、下手に契約を結ぶと倫理観が劣化するんですよ。日本はそういう考え方です。キリスト教における契約というのは、普通の1対1の対等な契約ではないでしょう。

【質問】 そうですね、割と一方的でそれで罰も与えて、神様というのは結構怖いんですよ。

【中谷理事長】 それに善行を重ねたから、神が恩寵を与えるかということもそんなこともないでしょう。聖書にもすごい一生懸命やっている人が最もひどい目に遭うとかいう話が出てきます。

人知のはかり知れないところで、神様がいろいろな形でおぼしめしをくださっているという考え方なので、契約というけれども、普通、AさんとBさんが契約しましたという契約とは全然違うと思いますよ。私

の知っている限り。日本人は伝統を大事にしながら毎日の生活をまじめに全うするということに価値観を持っている人が多いわけで、全知全能の神がいて、その人は自分たちとは隔絶した存在だという感覚になじめないでしょう。

しかし、それでは、韓国人はなぜキリスト教に転向する人が多いのかという疑問が出てくるかもしれませんね。その答えは「事大主義」です。長いものには巻かれるという思想です。韓国は地政学的に中国に隣接し、圧倒的な中華文明の影響を受けてきた。多くの局面では好き嫌いとは無関係に、中華思想に従わざるを得なかった。そういう歴史を持つ韓国ですから、その時々権力者に従うという傾向が強いのではないのでしょうか。今は西洋文明が入ってきて、それに従うというのが韓国での当然の価値観になります。だからキリスト教が日本よりもずっと簡単に受け入れられたのではないのでしょうか。

日本は島国で外国に攻められることもほとんどなくて、自分たちの神話の世界で受け継がれているエトスを維持して、すべて「日本流」でやってこられた国です。だから圧倒的なパワーを持つ全知全能の神様は感覚的に合わないと思っている人が多いと思います。ですから、ミッションスクールの卒業生でもキリスト教に改宗する人は非常に少ないですね。

【司会】 どうもありがとうございました。

ちょうどお時間になりましたので、改めて理事長に拍手をお願いいたします。(拍手)

ご出席の皆さん、本当に90分間ありがとうございました。

開催日：2016年4月27日